甲府市議会議員へのアンケート調査に基づく ボートマッチ作成の実証研究

－これからの有権者の選挙リテラシーとは－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野　加藤輝

1. 研究背景・目的

より多くの若い世代の意見を反映していくことを意図して、2015 年に公職選挙法が改正され、18 歳選挙権が実現した。しかし、16 年の参議院選で 10 歳代の投票率は約 47%であったのをピークに段々と投票率が低下し、2022 年の参議院選挙では、全体が約 52%であったのに対し、18 歳で約 38%、19 歳で約 30%の投票率となった。さらに、平成 30 年に行われた内閣府の調査では、日本の若者は諸外国と比べて政治への関心が相対的に低いことも指摘されている。

これに対し、平成 30 年に学習指導要領が改訂され、高校では「公共」という教科が必修科目として新設されることになった。これは急激な少子高齢化の進展、グローバル化、自然災害への対応など、我が国が厳しい挑戦の時代を迎える中で、これからの社会を創り出していくために必要な資質・能力を効果的に育むための中核を担う科目として新設されたものである。しかし、政治的中立性に配慮しているためか、各政党がどのような主張をしているかに踏み込んだ記述はみられない。

こういった状況において、高校生の政治への関心を高め、高校生が社会問題について考え、主体的に行動しようとする資質能力を育むために、現代社会の政治的な問題について授業で扱うことなどが重要になると考えられる。しかし、峯川・斎藤(2020)で述べられているように、教育現場では政治的中立という点から、指導の在り方や教材の準備などで悩む教員は少なくないという。

そこで筆者は、ボートマッチ（vote match）のもつ教材としての価値に注目した。ボートマッチとは、選挙の際に立候補者が回答したアンケートと同じ質問に答えることで、利用者と政党や立候補者の政策に対する考え方がどれだけ一致しているかを、数値化して知ることができるサービスのことである。

昨年度の研究である加藤(2023）では、ボートマッチの活用によって、政治的に対立する見解がある現実の課題を教室に導入し、これにより生徒の政治的関心や政治的リテラシーを高めることにつながることを明らかにした。

一方で、ボートマッチの作成者が設定した項目選択次第で、個々の利用者と各党との考えの一致度が変わりうるという問題があり、政治的な偏りの可能性に配慮することができないことが、加藤(2023)の課題となった。

そのため、本研究では高校生にボートマッチを作成させ、利用させてみようと考えた。このねらいは、①生徒の政治への関心を高めること、②生徒自身がボートマッチに潜む政治的な偏りの可能性を理解し、活用についての認識を形成したりすることができるようになることである。これらを本研究の仮説とし、実証することを研究の目的とした。

2. 研究方法・内容

2-1 生徒の実態

本研究では、山梨県甲府市内の県立高校２年生の公共の時間における、研究授業の実践と生徒へのアンケート調査をもとに研究を進めた。また研究授業を行うクラスの生徒の実

態を把握するために、普段の授業の観察と事前アンケートを実施した。

普段の授業では、主に教師の話を聞きながらワークノートを進め、授業終わりにその時間のまとめを行っていた。授業の際には生徒が意見を述べる機会があまりないが、振り返りシートには多くの考えが記述され、授業から多くのことを考え学ぼうとする姿勢がある生徒が多いことがうかがわれた。

また事前アンケートから、生徒の政治への関心、甲府市議会議員の認知度、4 月の甲府市議会議員選挙への関わり方、投票をする際の基準、甲府市への不満などを調査し、研究授業に活かした（結果については後述）。また、甲府市に住む生徒はクラスの半分ほどであることがわかった。

2-2 甲府市議会の協力

ボートマッチを作成するにあたって、まず 4 月の甲府市議会議員選挙の際に作成された公報や、市議の広報誌、などで情報を収集したが、思うようなボートマッチを作成することができなかった。そこで本研究では、生徒が作成した質問に対して現役の甲府市議会議員に協力をしていただき、ボートマッチを作成することにした。

協力をいただくにあたっては、大学の先生のご縁を通じて甲府市議会議会局とつなげていただき、依頼内容や方法について打ち合わせをしたうえで現役の甲府市議会議員に協力をしていただけるように調整した。

その後、一回目の研究授業で生徒が作成した甲府市議会議員への質問と回答の選択肢をまとめたアンケート調査を、甲府市議会議員 32 名全員に送付していただき、18 名からの回答をいただくことができた。

また、市議会議員を対象にボートマッチを作成した理由は２つある。一つは、2023 年 4 月に統一地方選の中で甲府市議会選挙も実施されタイムリーな話題であったこと。もう一つは、市政は生徒達にとって身近な問題にダイレクトに答えることができるものであり、具体的で考えやすいと考えたためである。

2-3 研究授業

本研究では、３パターンの研究授業を行った。（表１）それぞれの違いとしては、研究授業（A）では、ボートマッチを作成すること、研究授業（B）では、作成したボートマッチを利用しボートマッチについて考えること、研究授業（C）では、ボートマッチを作成していない生徒にも同様の授業を行い、ボートマッチを作成したことの意義を調べることを主な目的とした。

表１　研究授業の概要

	研究授業（A）	研究授業（B）	研究授業（C）
授業日	2023/10/18	2023/11/30	2023/12/1
対象クラス	ボートマッチ作成に関わる２クラス	ボートマッチ作成に関わる２クラス	ボートマッチを利用するだけの２クラス
授業のねらい	選挙の際に、どんなことを主張する政治家を選びたいかを考え、学校が位置する甲府市の政治家を選ぶ際に争点となる事案について意識を持ち、見識を深める。	生徒達が作成した質問に基づくボートマッチを実際に行ってみることで、甲府市議会議員との距離感を感じるとともに、ボートマッチそのものの課題にも気づき、ボートマッチ利用時の留意点を意識してより良いボートマッチの活用につなげることができる認識を育成する。	他クラスの同級生が作成した甲府市議に関するボートマッチを利用することで、甲府市議会議員との距離感を感じるとともに、ボートマッチそのものの課題にも気づき、ボートマッチ利用時の留意点を意識してより良いボートマッチの活用につなげることができる認識を育成する。

授業内容	①法の単元との接続 ②生徒と選挙のつながり ③選挙運動と政治活動 ④何を基準に投票するか ⑤甲府市議へのアンケート作成（教員が設けた 11 のテーマから、生徒は 8 つのテーマから一つ選び作成）	①前回の振り返り ②「えらぼーと」の確認 ③自クラスが作成したボートマッチの利用 ④他クラスが作成したボートマッチの利用 ⑤結果の比較 ⑥ボートマッチの良さや課題についてクラス内で意見交換 ⑦事後アンケート	①事前アンケート ②選挙運動と政治活動 ③何を基準に投票するか ④「えらぼーと」の確認 ⑤同級生が作成した二つのボートマッチを利用 ⑥結果の比較 ⑦ボートマッチの良さや課題についてクラス内で意見交換 ⑧事後アンケート

研究授業（A）で取り上げた、教員が設けた 11 のテーマは次のものになる。

人口減少（例 2-1,2-4）、教育（例 2-4）、医療・介護（例 2-1）、防災、観光、中心地の活性化、交通、移住・定住促進、防犯・治安、健康、保育

例とあるものは授業者が見本として示し、それ以外の 8 つのテーマに関連したアンケートを生徒が作成した。ボートマッチが作成者によって取り上げるテーマが若干違うということを表現するに、一つだけ違うテーマを設定したという意図である。尚、生徒が作成した質問と選択肢例は表 2 である。

表 2　作成した質問と選択肢（一部）

質問番号 テーマ	質問	選択肢
① 防災	甲府市(山梨県)の防災に関して最も重点的に行いたい取組はありますか？	1　アプリをつくり、甲府市の防災情報や避難場所の案内、防災対策の発信を行う 2　耐震性のある施設の設置 3　堤防の設置や川幅を広げる 4　ポスターの配布、掲示や防災に関する放送 5　学校等での定期的な防災教室の開催、啓発活動 6　周囲の県からの支援を募る、協定を結ぶ 7　無回答
② 観光	甲府市の観光客を増やすためにどのようにＰＲまたは発展させていけば良いと思いますか？	1　新グルメを作る 2　体験型グルメサービスの実施（ほうとうやワインをつくる体験など） 3　自然を活かした観光地の整備 4　商店街をリニューアル 5　規模の大きなイベントの開催 6　娯楽施設を作る 7　無回答

2-4 ボートマッチの作成

研究授業（A）と（B）の間の期間で、甲府市市議会議員からアンケートの回答をいただき、Google のスプレッドシートにその回答を整理し、生徒が生徒自身の回答を入力すれば、議員の回答とどれくらいマッチしているかが視覚的にわかりやすいものを作成した。これが今回作成したボートマッチになる。さらに、シートには議員の方からいただいた生徒へのコメントも掲載し、生徒と議員の距離感を近

づけられるような仕掛けをつくった。

尚、大まかな概要については、図１・２に、見本版のスプレッドシートのリンクにつながるものを巻末に掲載した。

			Ⅱ組	D		J		M			
				70.0%		70.0%		70.0%			
				3	4	9	10	13	16	17	
	↓半角数字で入力		議員名	C	D	I	J	M	P	Q	R
質問	回答欄		名前の記	OK	OK	NG	OK	OK	OK	OK	OK
①	1		①	1	2	2	1	1	2	2	
②	2		②	2	2	5	2	2	2	5	
③	1		③	3	1	1	1	1	1	1	
④	3		④	4	3	2	2	3	2	1	
⑤	3		⑤	3	3	3	1	3	3	3	
⑥	2		⑥	1	2	1	2	2	2	2	
⑦	4		⑦	5	2	1	1	3	1	3	
⑧	1		⑧	1	1	2	1	1	3	1	
⑨	3		⑨	1	2	1	3	2	3	3	
⑩	4		⑩	4	4	3	4	2	3	3	

図１　作成したボートマッチの作成スプレッドシート（見本）

	C	D	I	J	M	P	Q	R
全体	45.0%	55.0%	50.0%	45.0%	50.0%	50.0%	50.0%	30.0%
Ⅰ組	40.0%	40.0%	80.0%	20.0%	30.0%	50.0%	50.0%	20.0%
Ⅱ組	50.0%	70.0%	20.0%	70.0%	70.0%	50.0%	50.0%	40.0%
Ⅰ組とⅡ組の結果の差	10.0%	30.0%	60.0%	50.0%	40.0%	0.0%	0.0%	20.0%

図２　結果の比較に使用する表（見本）

2-5 事後アンケートの分析

事後アンケートは、研究授業直後と一月ほど時間が経ってから（１月中旬）の２度実施した。アンケートでは、政治への関心や授業後の変化に加え、ボートマッチの良さや問題点・課題点などについて調査し、関心の変化や記述の分析を行う。その際に、ボートマッチを作成したクラスとそうでないクラスとで結果にどのような違いが出たかを調べ、ボートマッチを作成することにどんな意義があったといえるかについてまとめる。

3. 結果・考察

研究授業後のアンケート調査から、①生徒の政治への関心を高める、②生徒自身がボートマッチに潜む政治的な偏りの可能性を理解し活用についての認識を形成する、という本研究で設定した仮説の二点を支持することができたのかについて結果を踏まえて考察していく。

3-1 政治への関心

国の政治に対する関心と甲府市の政治に対する関心については、0～2 の三段階評価で回答してもらい、その平均の変化が図３図４で示すグラフのようになった。関心がない場合は 0、ある場合は 2 で段階的に回答してもらったため、高い値であるほど関心が高いことを示す。

結果から、ボートマッチ作成クラスと利用のみのクラスのどちらも、国の政治に対しても甲府市の政治に対しても、授業を通して関心が高まっていることが伺える。しかし、ボートマッチ作成クラスは利用のみのクラスと比較して、国の政治に対する関心が増加して

いたり、甲府市の政治に対する関心の下がりが少なかったりしていることが違いとして現れた。

次に、「研究授業後に、甲府市や身の回りの地域の現状について、何か調べましたか？」というアンケートから、ボートマッチ作成クラスは 30.3%（66 名中 20 名）が“調べた”と回答した一方で、利用のみのクラスでは 18.6%（59 名中 11 名）が“調べた”と回答したことがわかった。

この結果から、ボートマッチを作成することで、時間をおいてからも関心の高まりが維持しやすく、授業後に自主的に情報を集め考えようとする姿勢が育まれるということが示唆された。このような結果となった要因としては、ボートマッチを作成する過程で自分たちが考えた質問や選択肢に政治家が回答してくれ、コメントなどもいただけたことが政治とのつながりを感じさせ、政治への関心が高い状態を維持したのではないかと考えられる。

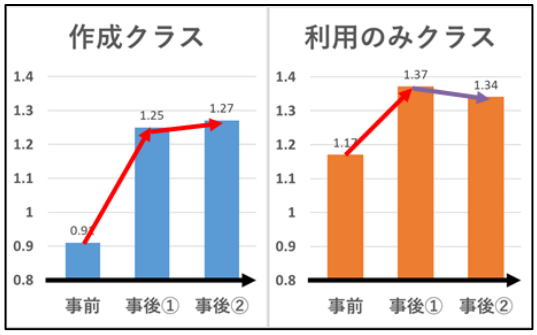

図３　生徒の政治への関心の変化（国）

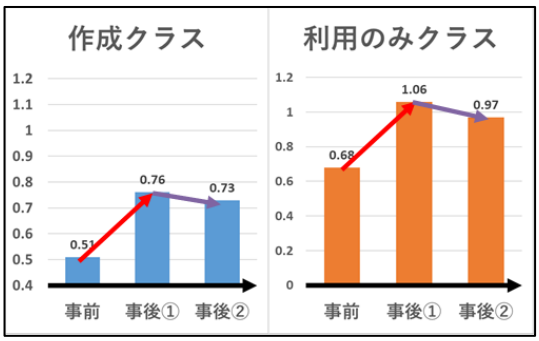

図４　生徒の政治への関心の変化（甲府市）

3-2 ボートマッチに対する理解

アンケート結果から、ボートマッチの良さや問題点・課題点についての生徒の代表的な意見をまとめたものが表 3 である。事後アンケート①・②を通して、研究授業に参加したすべての生徒から表 3 の意見のどれかに関わる意見が出された。表 3 にあるように、多種多様な意見が出され、多くの生徒がボートマッチの良さと問題点について気が付いていることから、概ね仮説を支持することができたと考えられる。またボートマッチを作成したクラスと利用のみのクラスで大きな違いはみられなかった。

しかし、ボートマッチの良さについて「自分はあまり考えなくていい」や「誰に投票したらいいかわかる」という意見が、問題点・課題点で指摘されている「政治に対して考える機会が減ってしまう」や「満足な結果が得られないときがある」の裏返しであり、良さとしていいのかということが気になる。今回に限っては、良さでこういった回答をした生徒は問題点・課題点でも裏返しの側面について意見を回答しているため、生徒はボートマッチの多面性を捉えることができていたといえる。

こういった多種多様な意見が出されたことに最も影響があったと考えられるのが、作成された二つのボートマッチを利用した際の結果の違いである。両クラスでつくったものを利用してマッチした人物に違いがあった生徒が 128 名中 114 名（約 89%）存在し、生徒によっては最大で 70%もマッチ度に違いがあった。生徒たちは二つのボートマッチの結果の違いから、認知的不協和を感じ、それを解消するために考えた結果、ボートマッチの多面性について生徒が気付きを得たと考えられる。また大きな結果の違いが生まれた要因としては、内容の精査がされていないボートマッチを作成したことが考えられる。ボートマッチの質問や選択肢の作成については、事前予告がしてあったものの、基本的には研究授業内の 30 分ほどで生徒達が作成したものになる。そのため、多様な解釈が生まれうるものや、一問一答で答えるのが難しい質問の設定などになっているものが多かった。国政

選挙の際などに、新聞社や各種団体で作成されているものと比較して、回答をするのが難しい、ボートマッチとしてはレベルの低いものになったが、学習教材としてはむしろ気づきが多い良いものになったのではないだろうかと考察する。

表３　ボートマッチの良さや問題点・課題点に対する生徒の意見

ボートマッチの良さ			
生徒の意見	作成クラス（66 件）	利用のみクラス（59 件）	%の差
・簡単に気軽にできる	55（83.3%）	47（79.7%）	3.6%
・自分の意見にあった議員を選べる	38（57.6%）	35（59.3%）	-1.7%
・投票する際の判断材料にできる	34（51.5%）	34（57.6%）	-6.1%
・議員の考えが大まかにわかる	26（39.4%）	27（45.8%）	-6.4%
・政治に関心を持たせやすい	16（24.2%）	26（44.1%）	-19.9%
・数値化されていたりしてわかりやすい	23（34.8%）	18（30.5%）	4.3%
・政治や社会に詳しくなくていい	22（33.3%）	18（30.5%）	2.8%
・誰に投票したらいいかわかる	19（28.8%）	15（25.4%）	3.4%
・自分が応援したくなる政治家が探せる	15（22.7%）	19（32.2%）	-9.5%
・調べるのが面倒で投票を棄権する人を減らせる	22（33.3%）	11（18.6%）	14.7%
・自分の意見を整理できる	16（24.2%）	14（23.7%）	0.5%
・いろいろな意見を知れる	8（12.1%）	13（22%）	-9.9%
・自分はあまり考えなくていい	2（3%）	4（6.8%）	-3.8%
ボートマッチの問題点・課題点			
生徒の意見	作成クラス（66 件）	利用のみクラス（59 件）	%の差
・選択肢以外の考えをもつ場合は回答が難しい	40（60.6%）	33（55.9%）	4.7%
・ボートマッチにとらわれ、鵜呑みにしてしまう	34（51.5%）	33（55.9%）	-4.4%
・作成者によって結果が変わる可能性があり、満足な結果が得られないときがある	33（50%）	27（45.8%）	4.2%
・選択肢が少ないと「無回答」が増えてしまう	22（33.3%）	22（37.3%）	-4%
・一問一答で答えられるものばかりでない	17（25.8%）	16（27.1%）	-1.3%
・議員の回答は意見であって、実際に実行するかどうかは不明であること	18（27.3%）	12（20.3%）	7%
・政策の問題点などを考えずに回答できてしまう	14（21.2%）	14（23.7%）	-2.5%
・マッチしなかった人に対して批判的になり、違う意見に目を向けられなくなる	16（24.2%）	11（18.6%）	5.6%
・質問や選択肢に専門用語があると、意味を勘違いした回答になりうる	14（21.2%）	8（13.6%）	7.6%
・なぜ違う意見なのかわからず、自分の考えに問題点があるかどうかわからない	12（18.2%）	7（11.9%）	6.3%
・現実味のある選択肢をつくることが難しい	8（12.1%）	5（8.5%）	3.6%
・政治に対して自分で考える機会が減ってしまう	4（6.1%）	6（10.2%）	-4.1%

3-3 ボートマッチを作成した意義（まとめ）

結果と考察から、ボートマッチを作成したことには次の 3 つの意義があると考えられる。

①利用するだけの場合と比較して、作成した生徒が継続的に政治への関心を持ちやすい。

②利用するだけの場合と比較して、作成後に、生徒の主体的な情報収集を誘引すること。

③一般に流通している、よくできたボートマッチでは気づきにくい、ボートマッチの問題性について気づきやすい教材になりうる。

以上から、「*ボートマッチを高校生が作成し利用することで、生徒の政治への関心を高めたり、生徒自身がボートマッチに潜む政治的な偏りの可能性を理解し活用についての認識を形成したりすることができるようになる*」という仮説を概ね支持することができると考える。3 つの意義と対応する生徒の関係は図 6 で示した通りである。

	作成し利用した生徒	利用のみ生徒
①継続的に政治への関心を持ちやすい	○	－
②主体的な情報収集の誘引	○	－
③ボートマッチの問題性に気付く	○	○

図５　3 つの意義と対応する生徒の関係

3-4 改善案

今回の研究授業では、以上のような結果が得られたが、「政治に対して自分で考える機会が減ってしまう」「なぜ違う意見なのかわからず、自分の意見に問題があるのかどうかわからない」など、重要であるがそれを指摘する生徒が少ない意見がある。このことから、多くの生徒がボートマッチの多面性をより深く認識するためには「良さ」「問題点・課題点」という視点だけでは不十分であったといえるのではないだろうか。

そこで、問題点に気付きやすくするための工夫として、以下の 4 点が考えられる。

①「作成者」、「利用者」、「政治家」、「地域社会」、「日本」の立場としてなど多角的に考える機会をつくること。

②マッチした人とマッチしていない人とでどのようにイメージが違うかをメタ認知させ、マッチした人だけに注目するだけでなく、なぜ違う意見があるのかについて考えを促すこと。

③クラス内でなぜその意見をもったのかを議論すること。

④ボートマッチをつくる際に、あらかじめ議員の方にもなぜその回答をしたのかの理由もいただいておくことなどをすること。

これらの工夫を通じて、ボートマッチの多面性について認識を深め、より熟慮したうえで投票を行うこれからの有権者に必要な資質能力を育成できるのではないかと考える。

4. 今後の展望

今後の展望は以下の二つである。

①ボートマッチを利用するハードルを下げるために何ができるか

本研究では、選挙の際に活用が期待されているボートマッチサービスの問題性に気付くことが、これからの有権者に必要な選挙リテラシーであるとして、研究を進めてきた。しかし、堤（2019）ではボートマッチの利用に消極的な人として、「教育程度が低い人」「政治知識が低い人」などを指摘している。

本研究はボートマッチを利用することを前提として、政治への関心を高めたり、政治に参加する意欲の醸成につなげたりしていきたいというものである。そのため、教育全体や社会科教育の中でどのような資質能力を育成していくことが、ボートマッチの利用につながるのかについても今後追究していきたい。

②政治的リテラシーを育成するために、質の高いボートマッチを作成する

本研究では、生徒が事前に甲府市の問題について入念に調査・検討して、甲府市議会議

員への質問や選択肢を作成したわけではなく、生徒のもともとの知識や経験、インターネットで調べたことなどをベースにしてアイデアを出し合ってつくられたものである。そのため、新聞社や各種団体が作成しているものよりも回答がしにくいものが多分に含まれた質の低いボートマッチができた。

今回の場合は、それが教材として機能したが、生徒が甲府市の政治についてより深く理解し、政治的リテラシーを深めていくためには、質の高いボートマッチを目指して学習に取り組む必要があると考える。例えば、近藤（2009）では、ドイツでは専門家と協働してアンケートを作成するという事例も紹介されている。そのため、総合的な探究の時間を利用したりしながら、質の高いボートマッチの作成を試みていきたいと考えている。

謝辞

本研究を進めるにあたり、協力校の生徒の皆様、先生方、甲府市議会議員の皆様、甲府市議会局の皆様には多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

そして終始暖かくも適切な助言をしていただきました宇多賢治郎先生に深く感謝いたします。さらに、古家貴雄先生には研究を応援していただけるだけでなく、甲府市議会局の方とつなげていただきました。深く感謝申し上げます。最後に、研究について話を聞いていただき、様々な形で指導助言をいただきました大学院の皆様には感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

○. 参考・引用文献

・加藤輝、『ボートマッチとトゥールミン図式を活用した政治的リテラシー育成の実証－中学校社会科の憲法９条学習を通して－』、山梨大学教職大学院実践研究報告書、2023年
・近藤孝弘、「ドイツにおける若者の政治教育」、『学術の動向』14 巻 10 号、2009 年
・政府広報オンライン、「若者の皆さん！ あなたの意見を一票に！」のページ（2024 年 1 月 25 日閲覧確認）
https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201602/1.html
・総務省、「私たちが拓く日本の未来【活用のための指導資料】有権者として求められる力を身に付けるために」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000815490.pdf
・堤英敬、「投票支援アプリケーションの可能性と課題」、香川大学、科学研究費助成事業研究報告書、2019 年
・峯川浩一・斎藤周、「高校における主権者教育実施の課題と政治的中立性」、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編第 69 巻、2020 年
・文部科学省、高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説公民編、平成 30 年 7 月

○作成したボートマッチのスプレッドシート（配布用）

https://docs.google.com/spreadsheets/d/1T1eniXBe_GvSzs89R5D--857GX5feReJ/edit?usp=sharing&ouid=104939285135950251791&rtpof=true&sd=true